瀬戸内晴美作品集〇6〇

おだやかな部屋 他

筑摩書房

瀬戸内晴美作品集　第六巻
昭和四十七年八月十五日　第一刷発行

著者　瀬戸内晴美
発行者　井上達三
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話　東京(二九二)七六五一(代表)
振替　東京　四一二三
郵便番号　一〇一―九一
印刷　明和印刷・製本　矢嶋製本
装幀　中島かほる

(分類) 1393 (製品) 72606 (出版社) 4604

目次

死せる湖　三
奈落に踊る　一〇九
おだやかな部屋　二二一
解説　平岡篤頼　二二九

死せる湖

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序章　雪

椅子は、ルイ王朝時代のロココ風の典雅さに輝いていた。無数の真珠をちりばめた白銀色の支那緞子でつつまれ、背もたれも肘掛けも、若い女の裸の胴か腕のように、ふっくらとしたまろやかさに照り映えていた。腰かけの部分は、どこよりも柔かそうなのに、底にねばりのある弾力をおしつつんでいるようにも見え、うつ伏せに寝た女の、青みがかった翳りをもつ窪みをみせた豊かな背を想わせた。それは、一点のしみも浮べない少女の裸身のように清浄で、優雅で、淋しいまでの品位にみたされていた。三日三晩、執拗に降りつづいた何十年ぶりとかの大雪のせいか、黎明はいつもより足速に訪れているようだ。あるいは、降りつもった雪あかりのハレーションが、黎明より一足先に、庭をほの明るくしているのだろうか。人影はなかった。犬の足跡も。小鳥の影も。広い芝生にゆるやかな傾斜をみせ、崖の切岸まで拡がっている一面の芝生には、花壇も池も石もなく、今朝はただ、純白の雪に覆いつくされている。山の手の丘陵地帯の端にあたるこの地域は、険しい切りたつ崖に支えられ、崖下は帯状の公園に囲まれていた。公園の縁を、更に瀬の音の高い深い運河がふちどって流れている。庭の崖寄りの端は、ヒマラヤ杉や、檜葉や、椿や、楓の樹樹に、塀のようにとり囲まれている。それらの樹々も、今朝は、砂糖菓子そっくりに雪で塗り固められていた。緑色の屋根に同じ色の窓枠をもった、アメリカ式の殺風景なモルタルの平屋建西洋館は、白壁だった。それも今朝は、雪の白さに圧倒され、グレーにくすみ、家全体が雪の海に沈みこんで、傾きかかった難破船のようにロマンティックだった。赤煉瓦の煙突だけが、雪をよせつけず、紫色の重そうな煙をたっぷりと、鈍色に低く垂れこめた雪空にむかってふきつけている。椅子は、崖を背にして、庭の丁度真中あたりに、唐草模様のパーゴラで囲われたテラスにむかって、ひっそりと横たわっていた。どの窓も、堅く緑色の鎧戸をおろしている家にむかって、たったひとつ、置き忘れられたような椅子は、すねて、首を背後にねじ曲げているようにも、甘えて、両腕を差しのべているようにも見える。それが、緑色のペンキで塗られた、崖下の公園の川ぶちのベンチそっくりの木の椅子だったのか、白ラッカーの吹きつけの、薄い金属板でつくられた粋なベンチだったのか、私には一向に思いだせなかった。というよりも、こんなにも雪が降りつづき、これほどの華麗な雪景色に、隣家の庭が塗りこめられるのを目にするまで、私は、毎日幾度とな

く見下していたその庭の真中に、そんなベンチが横たわっていたことに気づきもしなかった。もともと、どんな人が住んでいるのか、全く没交渉の隣家の住人にも、その味気ない殺風景な芝生だけの無表情な庭にも、日頃の私は、およそ関心をよせてはいなかったのだ。朝、遅い目ざめのあとで二階の寝室のカーテンを繰る時、いやでも見下してしまう隣家の庭は、手入れのあんまりよくない芝生の緑が無表情に太陽をはねかえして拡がっているか、枯芝がむく犬の背のようなうす汚れた感じで、ぽかぽかと弱い陽ざしを吸いこんでいるかだった。煙突と同じに、そこだけ赤煉瓦を敷きつめたテラスを囲んで、パーゴラに蔓薔薇がびっしり花をつけていた頃があった。いえ、あれは、黄金色の金雀児(えにしだ)の花が、灯をともしたように輝き、蜜蜂がそのまわりを翅をきらめかせながら群をなして飛びたち、五月の陽光を、おびただしく撒きちらしていたのだったかもしれない。薔薇色の頬をした金髪の巻毛の、ひとつ鋳型で押し出したようによく似た双児の兄弟が、水ピストルで虹のように水をきらめかせながら、西部劇ごっこをしていた夏の日……いえ、あれは、何時か観た映画の一場面だっただろうか。黄昏の庭を、月見草色のローンのワンピースでゆっくり横ぎっていった、まるい肩の豊かな女……ピンクとブルーの太い棒縞のパジャマで芝生の真中に突っ立ち、パイプをくわえながら、眼下の崖下に拡がり霞む街衢の屋根のうねりに目を放っていた男……夢とうつつのけじめもなく瞼の底に沈みこんでいるそれらの人物や、情景の中にも、あの椅子は一度もあらわれては来ない。消し忘れられた水銀灯の光りが、ヒマラヤ杉と、椿の樹の間から、間の抜けた光りをそらぞらしく椅子の方へのばしている。その光りを嘲けるように、今、ようやく裂かれはじめた鈍色の空の細い裂け目から、暁の光りが箭のように鋭く斜めに雪の庭に落ちかかってきた。純白の椅子に光りの箭がつき刺し、照明を受けた舞台の小道具のように、ふいに紫紅色に染められた。椅子は身震いでもしたように私の目の中で揺れ、縫いつけられた無数の真珠が音をたててきらめき、一瞬、艶めいた一匹の獣のように腹を波うたせる。

壁ぎわの夫のベッドが、軽いきしみをあげる。寝がえりをうった夫の低い歯ぎしり。一晩中、私のベッドに背を向けていた夫が、カーテンをしぼった窓からの光線の明るさに、夢の中にまで追いかけられ、陽光の方へふり向いたのだろう。見ないでも、私には、夫の額に落ちかかっている白髪のまじった堅い前髪の乱れや、高い鼻梁に滲んだ脂の照りが、くっきりと目の中に描けてくる……とは、思っているものの、そんな気がしているだけであって、もしかしたら、私は、夫の顔や、目や、鼻や、耳のひとつびとつも、

昔のようには正確に、ありありと諳んじては、いないのではないだろうか。丁度、残る隈もなく雪に覆いつくされた隣家の庭を見下し、雪のない日々の庭のたたずまいや表情が、今、一向に、何ひとつ正確に思い描けないのと同様に。私たちがこの丘の上の崖ぎわの家へ、疎開先の軽井沢から、人より遅い引き揚げをして、住みつくようになってからだって、既に十七年の歳月がすぎている。その間に、隣家の住人も、アメリカ人からフランス人、そしてまたアメリカ人からアメリカ人へと、四世帯に移り変っている。急な坂道の塀ぎわに開いた門の横壁に、片仮名で書いた横長の表札がうちつけてあるのを、私は坂の上り下りの時、無意識に目に入れては、いつのまにか変っていく住人の推移を識らされていた。十七年——十七年の間におこった私たち夫婦の間の様々な葛藤、軋轢、和睦の果しない繰りかえしの歴史。私たちが隣家に無関心のように、隣家の住人だって、自分たちの窓や庭から見える塀の向うの、二階建和洋折衷の無恰好な建物の住人に、関心など持ったこともないだろう。私たちの家の方が丘の上方に建っている上、境界の塀は高いので、隣家からは、私たちの寝室の窓と、夫の書斎の窓と、物干し台しか望めない筈だった。

雪がまた急に執拗におびただしく降りしきってきた。ガスストーブに曇ってきた窓硝子の中に、みるみる速度を増してきた雪は、短い無数の糸のようになって、絣模様を描いていく。こんなに静かに見えるのに風があるのか、雪の速さが風をおこすのか、時々、ところどころで、雪片はつむじ風にまきこまれたようにくるくる廻りはじめたり、雪の糸がほどきようもないほど複雑に交錯しあったり、目まぐるしく方向をかえたりする。一片の雪の行方を追いつづけてやろうと目を凝らすと、その速さに、張りつめた瞼が痛くなってくる。つい今しがたまで、柳絮のようにのどかに空中に泳いでいた雪と、同じものとは思えないあわただしい降り方。速度が増すにつれ、短い糸は長く尾をひき、やがて白い雨のように無数の線が窓を蔽う。白一色の背景の中に白い雨が糸をひくのだから、そのか細い一筋はどんなに見張っていてもたちまち見失ってしまう。眦(めじり)から、こめかみにかけて、ひりひり痛みがわいてくる。降りしきる雪の中に、たったひとつの椅子は、いっそう典雅で孤独にみえる。上等のレースか紗のカーテンが、椅子の四方にかけめぐらされ、あまりに高貴ななまめかしさをあらわにしている椅子を、私の目から隠そうとする。するとかえって、椅子は、カーテンの奥に、いっそうあらわな、なまなましい情感を滲みださせてきた。ふいに、椅子は私の目の中で一人のストリッパーに変身する。星のようなスパンコールを縫いつけた黒ビロードの、黄昏の蝙蝠ほどの小さな布裂

れ。まるでそれを輝かせるためにあるような、蒼味を帯びたまだ堅くか細い少女の裸身、抜き身の剣を横たえたように、端正に軀をのばした彼女の寝姿を一刻も早く蔽いつくそうとするように勢いをまして降りそそぐ雪の中に、椅子がまた、軽い身震いと共に姿をあらわす。いつのまにかその上にはゴヤのマヤの桃色大理石のような肌がながながと横たわっている。漆黒の髪と、漆黒の瞳、そのどこよりも黒々と艶をたたえた茂み……爪ぐれの花びらのような薄桃色の乳房と、首の後ろにあげた腕の、腋窩のほの紫の翳り、雪の翳りとあまりにも類似した軀のあちこちの窪みにうく翳、やや出目の白目のうるみと唇の鮮かな朱……その朱が焔のように透明になり、新鮮な血の凝固(かたまり)になり、いきなりそれは緋色の噴水になって、高々と血しぶきをふきあげる。純白の雪の中に、燃える緋ビロードで張りつめたような血塗れの椅子ひとつ。雪片は、椅子にたどりつくと見るや、たちまち同じ色に染めあげられ、その姿を見失ってしまう。私は椅子。雪のカーテンに閉じこめられ身震いをつづける血塗れの椅子。右の乳房の奥にわいている痛み、うずき。私はいつ、左の頬を窓硝子にくっつけていたのだろう。硝子は熱く、硝子は曇り、その奥に孤独な椅子は尚も、官能的な身震いをふるえつづけている。乳房の奥の鋭い痛み、いえ、奥ではない。乳首の下がわの紫色の、鳥の足跡のような歯型。乳首のまわりを月の暈のようにとりかこんでいる腐った山梔子(くちなし)の花びらのような隈どり。あれが菫色の濃い血のしこりのあとから薄れるまで四日もかかっている。夫とは寝ていないのだといくらいっても、納得しないふりをしたがり、必ず終りには噛みちぎられるかと思う烈しさで、そこまでの痕跡を残さないと離さない。声も出ない痛みに、しがみつくしかなく、唇と歯を離されても、硬直した私の指は彼の背から容易に剝がすことが出来ない。ざまあみろ、当分他のやつに裸は見せられまい。ばかねえ。身をずらせて脚元に沈みこんでいくなり、茂みの真上に飛び上るような痛みが加えられる。やがて、茂みのつづきのようにパンジーの花びらのような黒い影が滲みでてくる。乳房の痛みが軀の芯を貫き、パンジーの花びらの痛みにす速く結びつく。綾繻子の朱い支那衿の部屋着の下で、乳房は弾力を失い、掌の中にとけこむような柔かさに崩れている。十五歳の乳房、二十一歳の乳房、三十三歳の乳房、そして四十をすぎた今の乳房、かつての私の乳房のまろやかさと、弾力と堅さと柔かさ、そのなめらかさが、次第に熱くなる綾繻子の布地を通して私の指の腹によみがえる。切り取られた無数の乳房が、切口から血をしたたらせながら、ふたたび雪に清められてしまった孤独な椅子の上に投げだされていく。あれら失われた私の乳房。私の乳房のあたたかさ

となめらかさを愛撫した男たちの手首も、血にまみれながら乳房の山の上に折り重なっていく。

朝日が、雲をさき、いっせいに庭の雪がきらめき、目があけていられないほどの光りがあたりにみちてくる。たちまち太陽の熱にとけて崩れおちるかとみえた椅子は、雪の結晶の一粒毎に硬質な光りを乱反射しかえし、かえってダイヤモンドでかためられた椅子のように、しっかりと冷たく輝き、輪郭を際だたせながら横たわってきた。椅子の下の、仔羊の皮をつなぎあわしたようにふっくらとあたたかそうだった乳色のカーペットも、あからさますぎる陽光にむきだされた裸の白タイル敷になっている。水に濡れた白タイルの床。タイルを染め、濡れた水を押し流して一気に染めあげる鮮血の地図。手術室。白い椅子。

父の手術室は、壁も天井も白塗りだった。床は白タイル。そのタイルの上におびただしい血が流れているのを手術室にしのびこんだとたん、いきなり目にしてしまった私は、声もあげられないで、その場に気を失ってしまった。意識を失う瞬間に見た血のひろがりと、濡れたタイルの上を走る血の速さが、覚めてからも私を脅かし、それ以来、三年ばかり、私はよく血の色の波にさらわれ、血の海に溺れる夢を見てうなされた。六つの年だったか、七つの年だったか覚えていない。それにあの手術室で見たもうひとつの記憶と、どっちが前だったか後だったかも、今となってはわからなくなっている。いずれにしても、それ以来、私も、病院の方へ行くことは厳しく禁じられてしまった。父の病院は、表通りに面して門を開いたが、私たち家族の住いの建物は、裏通りに門を開き、完全に別棟建ちになっていた。父は毎朝、母屋と称する私たちの住いから、病院へ出勤する形をとり、夕方帰ってくる。昼食には、まれに帰ってくることもあったけれども、たいていの日は、パンの好きな父のために、様々な工夫をこらした母の手づくりのサンドイッチと、果物と、魔法瓶につめたスープの弁当を、病院へ運ばせた。たいてい、午後から手術のある日で、そんな日は、父は昼食に母屋へ帰り、家庭の匂いをかぐのを、気分がだれるといって嫌うのだった。弁当を運ぶのは若い女中の役で、母は、母以外には勤まらないもうひとつの用以外の時は、出来るだけ病院へは顔を出さないことにしていた。女中が弁当を運ぶ時、私はねだって、軽い果物の籠をさげさせてもらって、くっついていくこともあった。妹や弟は、病院へ行くことを禁じられていたが、私が父に弁当を運ぶ手伝いをしていることは、母も見て見ぬふりをすることが多かった。そのくせ、私が忘れたような時に、突然、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

母は、あの時お父さまは何ておっしゃったのとか、何してらしたとか、お部屋には誰さんと誰がいたかとか、看護婦たちの名をあげて、さも、さりげなさそうに訊いたりした。父はたいてい、私の入っていった時は白衣をぬぎ、病院用の部屋着をゆったりと着てくつろいでいた。若い看護婦が、寝椅子の上の父の背を揉んでいることもあり、皮張りの安楽椅子の上でひとり、葉巻をふかしていることもあった。まれには見知らぬ女客が、その部屋にいることもある。患者は通さない父の私室だから、女客は病人でないことだけはたしかだった。子供心にも、私は医者の子どもらしく、病院で女を見ると、病人か、見舞客かの区別が勘でつくようになっていた。女客はいつもはじめての人だったが、みんな申しあわせたように、私には揃って愛想のいい笑顔をむけた。客が私を見るなり、まあ、お父さまそっくりというのも同じだった。そしてあわてて、女の子はお父さま似が幸福になれるんですってと、つけたすのも同じだった。母の美貌は町でも評判だったから、その母よりも父親似だと女の子を評したことは、お世辞にもなっていないと気づくからだろう。私は母に訊かれても、不思議に父の病院の部屋で見知らぬ女客に逢ったとはいわないでいた。別に誰にとめられているわけでもないのに、それを母に隠すことで、私は父と共通の秘密をわけもっているような嬉しさを味わっていた。おしゃれの父はパリ時代につけた習慣から、いつでも軀にいい匂いをさせていたし、部屋着に凝って、むこうから持って帰ったり、註文してわざわざ送らせたりした愛用の部屋着をいくつも持っており、取りかえ引きかえて自分で愉しんでいた。妻や子どもたちのみなりにもうるさい方で、妹にはピンクやオレンジをつかわせても、私には紺とグレーの服しか着せなかった。子どもたちの中で、私ひとりが個性的だから、個性的な服しか似合わないのだときめこんでいた。そして実際、私は子どもらしい可愛らしい色や型の服を身につけると、借り着のようにちぐはぐにみえた。私は父の、香料と葉巻と消毒薬の匂いのいりまじった体臭が好きだった。色の白い父は女のように肉が柔かく弾力があった。殊に薬で洗いつけている掌や指はしなやかで、指の腹は、すべすべしていた。父がパリからの土産に買って来てくれたというので、母が大切にしているエルメスの緑色の鹿革の革手袋に、内緒で触った時の感触と、それはそっくりだった。女中がいつか、田舎の家から穴をあけたボール箱にいれて、私たちに持って帰ってくれた蚕をつまんだ時の、あの感触とも、それはそっくりだった。母は子どもたちをほとんど父の傍へよせつけまいと気を配った。お父さまはお疲れだからというのが理由だった。実際、父はいつでもいくぶん疲れていた。父は特に手術がう

まいという評判だった。美男ではなかったが、患者をくつろがせ、気を許させるあたたかな表情を持っていたし、何より、堂々とした日本人離れのした恰幅が、患者に頼もしい印象を与えた。力強い体格で先ず患者を信頼させ、疲れたような表情と目つきで、同時に患者に親密感を抱かせる。父は病院の外でもこの人心収攬術を適用して女たちを自在に操っていた。あの決定的な事件がおこるまで、腕のたつ、隆盛な病院の院長としての父の女関係に、町の人たちは、むしろ寛大だった。子どもたちの中で、私ひとりが例外にされ、いつでも父に近づくのを母に見逃されていたのは、私が何かにつけ、母のいいなりにならない子どもであったばかりでなく、周期的に襲う父の不機嫌を直すことの出来る唯一の人間だったからだ。私は父の傍によると、必ず、抱かれようとして身をすりつけていく。父と話すということは、私にとっては、父と接触するということに外ならなかった。私は父のすべすべした指の腹で頬をつつかれたり、首を撫でられたり、耳朶をつままれたり、肘の内側のあたりを軽く撫でられたりすると、ぞくぞくして、あまりの気持よさに、もらしそうになってしまう。私はまた父といっしょによく風呂に入った。風呂好きの父は、朝と夕方、二度、風呂に入ったが、たまたまその場に私が居あわせると、おいでと、必ず誘った。その日も、湯殿のステンドグラスの窓からさしこむ陽の光りが、硝子の色に七彩に染められ、それが虹のように湯殿の中のこもった湯気を染めていた。小さい時から私は兄弟たちの中で目だって動作が鈍く不器用だった。洋服のボタンをかけたりはずしたりするのがなかなかうまくいかない。母はそんな時、根気よく見守って最後まで私にやらせた。父は脱衣場に入ると、内側から鍵をかけ、ふりむくなり、「さあ」と、うながす。母の見ていないところで、母に内緒で、父に服をぬがせてもらうのが私には無性に嬉しかった。私はわざと、脱衣場を逃げまわり、父の手に捕まるまいとする。なれあいの鬼ごっこが終り、適当なころあいに、父がわざと、乱暴に私の肩を摑む時、私は疳高い声をあげて、父の手の下にどさっと降伏する。その瞬間の、息ぎれが嵩じて頭も軀も真空になったような一瞬の快感は、深い目まいを呼ぶほどだった。父の手が私の服をぬがせ、下着にかかる時は、今の鬼ごっこで、私の下着は汗を吸い、もう一枚の皮膚のように軀にぴったりすきまもなく貼りついていた。父がその下着を下からくるっとはがしとってくれる時、私は父に自分の皮膚を剝がれているようなひりひりした緊張と痛みの期待に捕えられる。けれどもそれは、下腹からひやっと撫であげる冷気を感じるだけで、痛みより爽やかさとくすぐったさをまねくのだった。湯殿の中は、三方が水色のタイルで囲まれ、床

は黒タイルだった。ステンドグラスは、熱帯の花と蝶が図案化され、七彩にきらめいていた。たっぷりつくった湯舟の中でも、私は父と長い時間遊ぶ。ぬるい湯のすきな父の湯かげんは、長湯しても子どもをのぼせさせない。父の掌にお腹をささえてもらって、プールがわりに手脚をばたばたさせたり、湯のかけっこをしたりする。わけても、私はタオルで水坊主をつくり、それを掌でおしつぶす遊びが大好きだった。拡げたタオルで空気を包み、まるく真空状態にしてひきしぼり、タオルの裾は片手で水中にひっぱりこんでいる。あいた掌で、水面にくらげのように浮んでいる坊主頭を叩くと、思いがけない弾力を持って、はねかえしてくる。私はどうしてもその水坊主をつくることが出来ず、父につくってもらっては、もっぱら叩きつぶす役をする。父のつくる坊主は、びっくりするほど大きく、空気をいっぱい吸いこんでいた。他愛もないそんな遊びの最中に、つぶしたタオルが父の手をぬけ、ゆらゆらと、湯の中へ沈みこんでいった。桃色のタオルが沈みこんでいく速さにまけまいと、私は反射的に湯の中に肩まで腕をつけ、そのタオルをひきあげようとした。力みすぎた私は、その時足をすべらせて、父の軀の方へ全身で倒れかかった。その拍子に、私はようやく、まさに湯舟の底へ沈みかかったタオルを力いっぱい摑みとった。と、思った瞬間、私は自分の掌に異様な感触を摑んでいた。タオルのざらつく重い布の感触ではなく、ゴム人形の胴か、つきたての餅のような柔かで弾力のあるものが掌の中にあふれ、指の間から柔かさははみだしそうだった。とっさに、とんでもないことをしたというわけのわからない狼狽が私を包みこみ、私は湯の中で夢中で立ち上っていた。一瞬で、私は摑んだものを放したのに、私の掌にも指にも、その異様な感触はべっとりとこびりついていた。私は自分が泣きそうな顔をしているように思った。父の顔がなぜかまともに見られなかった。足の先で沈んだタオルをすくいあげ、父が私の手にかえしてくれるまで、私はぼんやり突っ立っていた。たいそう長い時間がすぎたように思った。父は目尻に皺をきざんで笑いながら、私の軀に手をかけ、くるっと、向きをかえて、自分の膝の間に抱きよせた。湯の中に沈んだたっぷりした安楽椅子に私は抱きこまれた形だった。服をつけた父のあぐらの中へ、私はしょっちゅう飛びこんでいって、背中を父にあずけ、あぐらの中に坐りこむのが大好きだった。客と話していても、本を読んでいても、そういう私が父は邪魔にならないらしく、軽く軀をゆすって、私を舟に乗っているような気持にさせてくれる。時々、父の堅い顎が、私のおかっぱの頭の上に降りてきて、ぐりぐりと、私の頭の毛をこする。私は下から頭で父の顎を突きあげるようにして、は

しゃいでしまうのだった。父のあぐらの中は、父にしかない甘さ、すえくささと、けものくささの入りまじった匂いがしていた。今、湯の中の裸の父には、体臭が薄れていた。私はいつも父のあぐらの中にしゃがみこんでいるような安らかさを失っていた。私は自分の小さな裸のお尻に触れているものから、気分をそらすことができなかった。座敷でするように、父が小きざみに、軀をゆすってくれる、青いタイルの色をうつした湯が、ゆらゆらと波をたて、ふたりのまわりへ波紋をひろげていく。父が軀をゆする度、私の神経はその一箇所に集中して、目の中は湯気がこもったように霞み、何も見えなくなってしまった。しだいに私は湯の中で、自分が重い鉛で出来た人形のように、ぎごちなく、醜く、灰色に固っていくのを感じていた。

「まだ降ってるのか」「ええ」「まぶしいな。カーテンひいてくれないか」「きれいだわ。川のふちに、てんとう虫みたいに毎晩自動車が並んで駐車してるでしょう。あの車も、みんな雪につつみこまれてしまって、寝ころがった雪だるまが行列してるみたいなのよ」「ストーブ熱すぎやしないか」「そうでもないでしょう」夫がベッドから降りて、窓と反対側の壁ぎわのストーブを調節している。私たち夫婦の間には、もうとっくに互いの意見を衝突させるという習慣さえ失われていた。めいめいがそれぞれの意見をのべ、それが合致しない時はお互いに黙りあう。夫が夫として妻に命令しなくなる前に、妻である私の、夫への依存と奉仕は中止されていた。「ねえ、隣の庭の芝生の真中に、ベンチがあったのをしっていて?」「しらないね」夫の返事が正確にかえってきたのが私を愕かせた。私は夫に話しかけていたのではなかった。

夫の短い旅行中、この部屋に通した男。男は部屋をほめず、窓からの眺めと、後でベッドのスプリングをほめた。この窓ぎわで、男は夜の飛行機からの眺めのようだと、眼下の街の灯の海を見下した。私は男に背後からゆるく抱かれていた。男は最初の日から、私をそんな形で抱擁した。背中を男に預けきったこの形が、私をかつて識らなかった平安の中につれはこんでくれた。川沿いの電車通りに、暗いビルのかげから、ふいに光る鱗をつけた蛇のように、灯のこぼれる窓をつらねた電車があらわれ、水が走るようなめらかさで、地を逼っていく。電車の中の虚しいほどの明るさが、乗客の少なさを際だたせた。窓に背をむけている客もこちらむきに坐っている客も、しんとした淋しさにうなだれているように見える。それでも彼等は、もっとあたたかな灯の色のともった自分の巣へ帰っていくところな

のだろう。動く灯の色は、いつでも私の軀の中にしんしんと冷たい風をまきおこした。峠をこえる夜のバスの中の白っぽい灯。鉄橋を渡る夜汽車の黄色い鱗のような灯。それと平行に川の中をきらめき渡る金色の蛇の背。銀河の中にまぎれこみ、飛びつづける飛行機の星より明るい灯。夜通し廻っている岬の燈台。深夜の海を往く船の灯。流れる星。「あなたの家はどっち」男に妻子があることは察していた。「見えないよ」男のきっぱりした声の響きから、私は男が今、嘘をついているのがわかった。案外男の家はあの黒い森のかげあたりかもしれない。窓が見える。薄いけしの花びらのように灯をうけてカーテンがふるえている。黒い人影。編目を数える女の白い横顔。首筋の黒子。キルティングの蒲団から、今にもはみだしそうにむっちりした裸の腕をなげだしている子ども。切りたての白布で覆われた食卓の品々。つましい、けれども心のこもったそれらの色、あたたかさ。男の目にも同じものが映り、揺れている。さざなみのたつ池の上の映像のように、それは波だち、光り、揺れる。男の目。この男の目は遙かなものしか映さない。男にみつめられているのに、男に捕えられている気がしないのは、男の目が、いつでも私を素通りして、もっと遙かなものしか見ていないせいなのだろうか。場末の酒場のスタンドで、偶然となりあわせに坐った最初の夜も、男は私に話しかけ、私の目の中をしっかりと覗きこみながら、私を見てはいなかった。見られているという感じのしない、その不思議な目の光りに、私はもっと捕えられたいと思ったのかもしれなかった。いや、そうではなく、私のかたちを、素通りする男の目の中に、私は私の内部の奥の奥、遙かな洞窟のはてを見極められたと思ったのかもしれない。暗い涯しない洞窟の奥、いつでも湿り、苔の匂いと、水の匂いと、薄荷草と毒だみの匂いのいりまじったその内奥。

あれも父の白い手術室の中だった。なぜ、手術室がそんなに幼い私をひきつけたのか。妹や弟たちは、母にいくらとめられていても、大人たちの目を盗んで、中庭を通りぬけ、手術室とは反対の待合室の方へ行きたがった。そこには見知らぬ人々がいたし、見知らぬ子どもたちもいた。小さな町の妊婦たちは、そこで産んだ子どもたちを、病院へつれてくるのを、まるで、祭りに里へ子どもをつれ帰るような気易さで、ためらわなかった。待合室へ行く道と、手術室へ行く道は、裾につわぶきの植わった青石のところで左右に別れていた。左へ行けば、待合室や玄関の方へ行き、右へゆけば、診察室と手術室があった。私はかならず右の道へ走りこむ。診察室の窓は高く、庭にむかってはどこにも出入口はなかったが、手術室は、白い陶器の把手のついた目立たないドアが、庭に面していた。そのドアは、ほと

んど母の出入りのためだけにとりつけられているといってよかった。父は結婚後、腎臓を患って手術し、尿が近くなっている。神経性のもので、気にするとそれはいっそうひどくなった。時間のかかる手術、とりわけ、難しさの予想される手術の時にかぎって、それは頻繁に訪れる。「今日は頼むよ」朝、出がけに父はさりげなく母にいう。母は、「手術は何時からですか」と訊きかえすだけだった。手術が始まって十分すぎると、母は緑色の唐草模様の風呂敷を持ってそっと出ていく。そのこと以外の用で母は病院へは行かなかったから、母の後姿を見ても、誰も母が病院へ行っているとは気づかないくらいだった。母は私たちが病院へ行く時のように、まるで禁じられた道を、こわごわ進むような物静かさで足音をたてず進む。つわぶきの青石のところへ出ると、母は私と同じように、ためらわず右への道をとる。大島の着物の裾さばきの絹ずれの音が、母の意外に速い歩みを伝えている。私が尾けていることなど全く気づかず、母は白い陶器の把手に手をかける。手術室の天井の半分は硝子張りの天窓がついていた。母は空気のように手術室へすべりこむ。麻酔のかかった患者はもちろん、緊張している看護婦たちさえ、気づかない静かさ。父だけが母の来たことを識っている。ほとんど待たせず、父は手術台を離れ、母の方へ歩いてくる。その時になって、看護婦たちは、母のいたことに気づき、二人の方へ背をむける。父はメスを持ったまま、両手を肩の上へ万歳をしたようにあげて、母の前に脚を開き仁王立ちになる。母が父の脚元にうずくまり、父の白衣の裾を開き、ズボンのボタンを外す。唐草模様の風呂敷からは、いつのまにか溲瓶がとりだされている。白い手術帽をかぶり、目の下までマスクでおおわれた父の表情は全くわからない。母の閉めたあとからひそかにドアをあけ、目だけで覗いている私には、それが父であるかどうかさえ定かではない。しっかりと首をあげ、背をのばし、母にすべてをまかしきった姿で、父は悠然と放尿する。静かな明るい手術室の中に、爽やかな水音だけがひとしきりきわだつのだ。持っていたものを床におろし、父の身仕度を直し、母はまた、重くなったものに風呂敷をかぶせ、すっと身をずらす。看護婦たちも母を見ないし、母も誰の顔も見ない。一言も誰も口を利かない。父はすぐ病人の方へ近より、何事もなかったように手術のつづきに入っていく。白タイルの上に真赤にあふれていた血を見た時と、母と父のこんな姿を見た時と、どちらが先だったのだろうか。ふたりのこんな姿を見たのは一度だったのか、何度もくりかえしたことなのか。記憶の網目にいくらわけいろうとしても、もう白い霧にまかれた歳月の奥で、何ひとつさだかでなくなっている。父と母が、しっくり気心の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com